Vol. 3
2014年
秋・冬号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング　発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
問合せ先：tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）※U-CoRo=ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/index.html

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす“上町台地”。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地　今昔タイムズ」を制作いたします。

なじみ・行きつけ・御用達 百貨店・商店街との思い出から垣間見る暮らしとつながりの変化

現代ではまちの姿が変わるのと同じく、まちなかでの暮らし方も大きく変化してきました。今号では上町台地でのまちと暮らしの変容を、百貨店や商店街での子ども時代の思い出話から垣間見ていくことを試みます。ご自身の思い出や、百貨店やお店、店主・店員さんたちとの関わりのあり様などに思いを馳せていただきながら、ご覧ください。

■豊かなつながりも垣間見える、百貨店・商店街との思い出

憧れの空間、華やかな雰囲気、滅多に行けなかったけれども思い出は今も輝いている百貨店。両親や祖父母の買い物のお伴、お使い、通学路など日常に溶け込んでいた商店街。上町台地の語り手一人ひとりの思い出話からは、人と人とのつながりをベースにした“豊かさ”が、そこかしこにあった様子が垣間見えてきます。

大阪の百貨店は大丸やそごう、三越などの呉服屋に起源を持つものと、阪急・阪神や近鉄、京阪など鉄道会社の系列に属するものに大別されます。呉服屋系は大坂三郷の旧市街に、鉄道系は旧市街の縁に設けられたターミナルに、それぞれ開店し、広がっていきました。一方、商店街は旧街道や寺社の参道沿いなど主要な道に開いたものと、個店が自然集積したものに大別されます。

ご近所や沿線など明確なマーケットを持ち、お客さん＝地域住民と店主・店員さんとの顔が見える関係が信頼を育んできた百貨店や商店街。子どもの頃の一つ一つの思い出は、耳に残る親御さんとお店の方との親しげな会話などもあってのものかもしれません。

阪急百貨店の屋上にて（中越慈子さん提供）　昭和36（1961）年頃

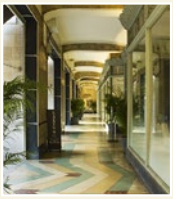
背景の地図は昭和30（1955）年発行の「大阪市街図」

百貨店の包装紙等資料／行俊良雄さん、中越慈子さん他提供

なじみ・行きつけ・御用達
百貨店・商店街との思い出から垣間見る暮らしとつながりの変化

■まちの未来への希望も映す、80～90年代の百貨店・商店街での思い出

上町台地のまちの次代を担う世代の思い出から浮かび上がるのは、商品やブランドを「売る」「買う」ということだけではない、人の匂いが漂う「何か」を求め続けていること。それが世代を超えて、今もなお継承されてきているようにみえます。言葉を交わさずに液晶上だけで済む買い物、互いの顔も覚えることのない店先の関係。そうした「利便」などに何かしら満たされぬ感性を、未来へリレーしていくことが、まちや社会にとってとても大切なことではないでしょうか。


かつて松坂屋だった高島屋東別館内には「高島屋史料館」も（入場無料）

1980～90年代、上町台地の子どもたちの思い出（現在30歳代の方）

松坂屋へは家族全員クルマに乗って。屋上の遊園地やゲームコーナーで遊んで、ご飯を食べて帰るパターンでした。
1日東区 玉造、昭和60年前後

今は屋上遊園地もないですし、自分の子どもたちは郊外のショッピングモールのほうが楽しいようです。
1日東区 玉造、昭和60年前後

三越が今も百貨店のイメージです。すごくいい雰囲気の建物でしたし、食堂へ家族で行くのも楽しみでした。
1日東区 石町、昭和60年前後

商店街との縁は薄いのですが、子どもの頃はご近所に生鮮品などを扱うよろず屋さんがあって、母の御用達でした。
1日東区 石町、昭和60年前後

祖父母も両親も通っていた北浜の**三越**は、おいしかったホットケーキとともに今もよく思い出します。
1日東区 島町、昭和60年前後

ペット屋さんやファンシー・ショップもあった**松坂屋**の屋上遊園地は、ご近所の遊び場の一つでした。
1日東区 島町、昭和60年前後

今も多くの人で賑わう心斎橋筋には昔からの有名店も健在

上六の近鉄では屋上遊園地やお菓子売り場のグルグル回る菓子売り機械、楽器売り場でピアノを弾きまくったり。
天王寺区 真法院町、昭和60年前後

布施にあったニチイも私には百貨店的な空間でした。遊園地もオモチャ売り場も何でもあって。
生野区 巽中、平成ひとケタ

心斎橋は地下鉄の駅がとても良い感じで、そこから百貨店気分でした。**上六の近鉄**はご近所さんですね。
天王寺区 真法院町、平成ひとケタ

百貨店は**アベノか上六の近鉄**ですね。弟が迷子になったときの館内放送や、回転する菓子コーナーなどが思い出です。
生野区 巽中、平成ひとケタ

高校・大学になってからキタやミナミにもよく行きだしましたが、でもまた地元へ戻ってきています（笑）。
天王寺区 真法院町、昭和60年前後

ずっとご近所だった**五条商店会**とは、今では会員としてのお付き合いに。仕事の手土産を買ったりもしています。
天王寺区 真法院町、昭和60年前後

桃谷の商店街は母との買い物や寄り道など思い出が一杯。郊外育ちの友達にその良さを再確認させてもらったり。
天王寺区 真法院町、平成ひとケタ

客とお店の顔が見え合う「行きつけ」「なじみ」なまちなか暮らし

百貨店や商店街、個店などとの関係を表す言葉に「行きつけ」「なじみ」があります。今回の聞き取りのなかでもその言葉が浮かぶお話がいくつもありました。「子どもの頃からの顔なじみ」「店の前を通れば声を掛けてくれる」「通りすがりに挨拶を交わし、ときには世間話も」。商店街やご近所の個店だけでなく、百貨店でも店員さんとのつながりがあっての「なじみ」「贔屓（ひいき）」だったことが垣間見えてきました。つながりの弱体化は地域コミュニティのなかだけで語られることが多いですが、買い物や職場、学校などさまざまな場面でのつながりの減退とも、一緒に考えていく必要もあるでしょう。互いに顔が見える「行きつけ」。家族ぐるみの「なじみ」の店。みなさんはいくつお持ちですか？

背景の地図は現在（平成25／2013年）のもの（データは国土地理院の電子国土webシステムから配信されたもの）

※平成元（1989）年、旧南区と旧東区が合区して中央区に、旧北区は旧大淀区と合区して北区に

■小さな地域の集合体でもある上町台地と大阪のまち

都市は地方や村との対比で語られることが多い言葉です。しかし、そのことに違和感を持つ都市人、上町人も少なからずいます。今回のマップでは百貨店などとの関わりを通した都市のなかの「小さな地域」も少し浮かび上がってきました。北浜にあった三越との縁が深い地域、大丸や心斎橋筋商店街との思い出が多い地域、キタやミナミとの距離感。「大阪」「上町台地」と一口でくくられるなかにも、地域性の多様さが垣間見えてきます。村の集合体が都市。語られる思い出は、それぞれの「村」の思い出。地域コミュニティやつながりの再生は、それぞれの地域で培われてきた小さな暮らしの文化の再生も伴うものである必要があるのかもしれません。

ご協力いただいた方々（順不同）
泉桂子さん、河合清司さん、河合浩司さん、吉見孝信さん、吉見良子さん、岸本智嘉子さん、岸本知子さん、K・Hさん、鈴木一男さん、鈴木伸廣さん、宮崎昌久さん、永井佳子さん、中西紘一さん、神田晃治さん、神田さとみさん、徳力修司さん、吉岡武さん、中越一之さん、中越慈子さん、中越敦子さん、冨士原純一さん、服部多嘉男さん、行俊良雄さん、吉村健一さん、金恵美さん、松原佳子さん、柴田尚子さん